

# 第1章 はじめに

## 1. 計画策定の目的

本市は、平成21年度に市制施行50周年をむかえ、未来をおもう先人たちのたゆまぬ努力により、いまの素晴らしい尾花沢市を築くことができました。

平成13年度には、平成22年度を目標年次とする第5次尾花沢市総合振興計画を策定し、「人と自然がおりなすふれあいの里」を将来像にかかげ、まちづくりを計画的に進めてきました。その結果、本市発展の基礎づくりが進み、市民のまちづくりに対する意識の高揚とともにまちの活性化が図られました。

一方、少子高齢化の急速な進行、地方の産業・経済の低迷、安全・安心への意識の高まり、環境保全意識の高まり、情報化・国際化の進展など、本市をとりまく情勢は、第5次総合振興計画の策定当時の予想を超えて大きく変化し、産業活動や市民生活に大きな影響を及ぼしています。

国においては、**三位一体改革**による行財政改革の急激な進行をはじめ、国の権限や財源などを地方に移譲し、国主導型行政から抜け出し、地域のことは地域で決める地域主導型行政への転換が進められており、自治体経営のあり方が大きく変化しています。

山形県においては、「緑と心が豊かに奏であい一人ひとりが輝く山形」を基本目標とする第3次山形県総合発展計画が平成22年3月に策定されましたが、その中で、本市が位置する村山地域の発展方向を“都市と農村が共鳴し合い、様々な県民活動が展開される田園都市圏「村山」の創造”としています。

本市としても、人口減少と少子高齢化が急速に進むなか、定住促進の視点から、保健・医療・福祉の充実をはじめ、産業の振興、快適で安全・安心な住環境の整備、子育て環境・教育環境の充実など、活力あるまちで多様な市民活動が展開されるまちづくりを進めていく必要があります。

今後、市内外の動向に的確に対応し、元気ある尾花沢市をつくり上げていくためには、市民参画や行財政の一層の効率化を進めながら、新しい自治体経営の確立を図っていかねばなりません。

このため、新しい視点と発想に立ち、輝ける本市の未来にむけたまちづくりの指針として、第6次尾花沢市総合振興計画を策定するものです。

市民と行政が連携し、新たなまちづくりを進めていくための指針となる本計画の愛称を「元気おばなざわ創造プラン」とします。

## 2. 総合振興計画の役割

この計画は、本市の今後10年間の進むべき発展方向と目標、重点施策を明らかにするもので、次の役割をもっています。

### 市民にとって

「市民と行政の協働によるまちづくり」に向けた、共通の目標、行動の指針となるものです。

### 市政にとって

将来像を実現するためのまちづくりの基本方針や基本施策を明確にし、本市の総合的・計画的な行政経営の指針となるものです。

### 国・県・広域圏にとって

市の立場と役割を明らかにし、国・県・広域圏の事業との調整・連携のための指針となるものです。

### 3. 総合振興計画の構成と計画期間

総合振興計画は、「基本構想」「基本計画」「実施計画」の3つで構成され、それぞれの内容と計画期間は以下のとおりです。

#### 1

##### 基本構想

基本構想は、市の特性や市民の意向、時代の潮流等を総合的に勘案し、まちがめざす将来像と、それを実現するための基本目標等を示すものです。

計画期間は、平成23年度から平成32年度までの10年間とします。

#### 2

##### 基本計画

基本計画は、基本構想に基づき、今後取り組むべき主要施策などを行政の各分野にわたって体系的に定めるものです。

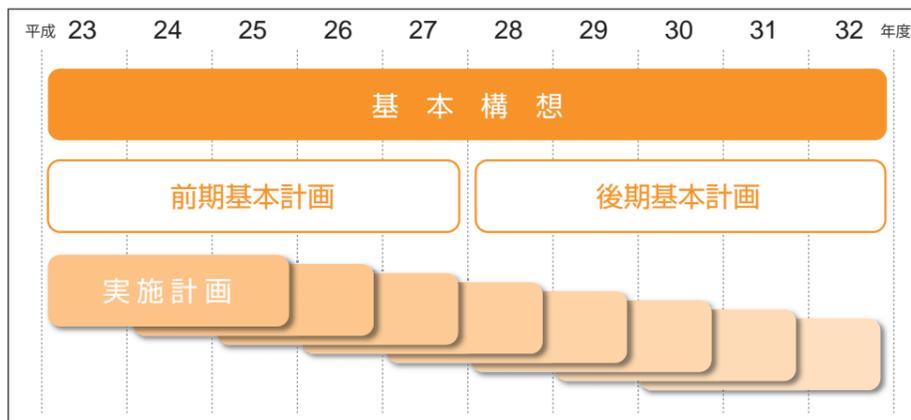
計画期間は、平成23年度から平成27年度までを前期基本計画、平成28年度から平成32年度までを後期基本計画として策定し、前期基本計画終了年に点検・評価し、後期基本計画の策定に向けた見直しを行います。

#### 3

##### 実施計画

実施計画は、基本計画に示した主要施策に基づき、具体的に実施する事業を定めるものであり、事業の優先順位や具体的な事業内容を示すことにより、予算編成の指針となるものです。

計画期間は、3年間として別途策定し、ローリング方式（毎年度見直す方式）により、本計画の進行管理を行います。



## 第2章 市の概要

### 1. 市の概況

#### 市の概況

尾花沢市は、山形県の北東部に位置し、東は奥羽山脈で宮城県仙台市、加美町等に接し、南は東根市、西は村山市、大石田町、北は最上町、舟形町に接しています。面積は、東西約25km、南北約33kmで372.32km<sup>2</sup>です。

地勢をみると、東部及び南北地域は、奥羽山脈に連なる起伏に富んだ山地、北西部は出羽丘陵の山並みが連なり、尾花沢盆地を形成しています。

市の西部に、日本三大急流に数えられる最上川が蛇行して流れ、丹生川をはじめ市内に流れるすべての一級河川が注いでいます。

気候は、年間の寒暖の差が大きく四季の移り変わりが明瞭な地域です。全国有数の豪雪地帯でもあり、飛騨の高山、越後の高田と並ぶ「日本三雪の地」に数えられる美しい雪景色が眺望できます。

道路・交通網をみると、市の西部を国道13号が南北方向に縦断し、新庄市及び山形市と結んでいます。また、国道347号が市の中心を東西に横断し、宮城県大崎市及び寒河江市方面と結んでいます。冬期は一部閉鎖となります。現在、東北中央自動車道等の整備が進められており、広域的な交通条件のさらなる向上が見込まれます。鉄道は、JR奥羽本線が市の北西部を南北方向に縦断しており、芦沢駅があります。また、山形新幹線の最寄り停車駅は大石田駅となっています。



#### 市の歴史・沿革

本市の歴史は、737年(天平9年)陸奥出羽按察使の大野東人が玉野大室の地に砦を築いたことに始まります。

江戸時代には幕府代官の陣屋が置かれ、羽州街道の宿場町、銀山の開発による鉱山のまち、豪商鈴木清風の活躍など商業のまちとして発展してきました。

また、俳聖松尾芭蕉が「おくのほそ道」行脚で10泊したまちとして知られています。

明治時代に、現在の市をかたちづくる尾花沢町、福原村、宮沢村、玉野村、常盤村の1町4村が成立しました。

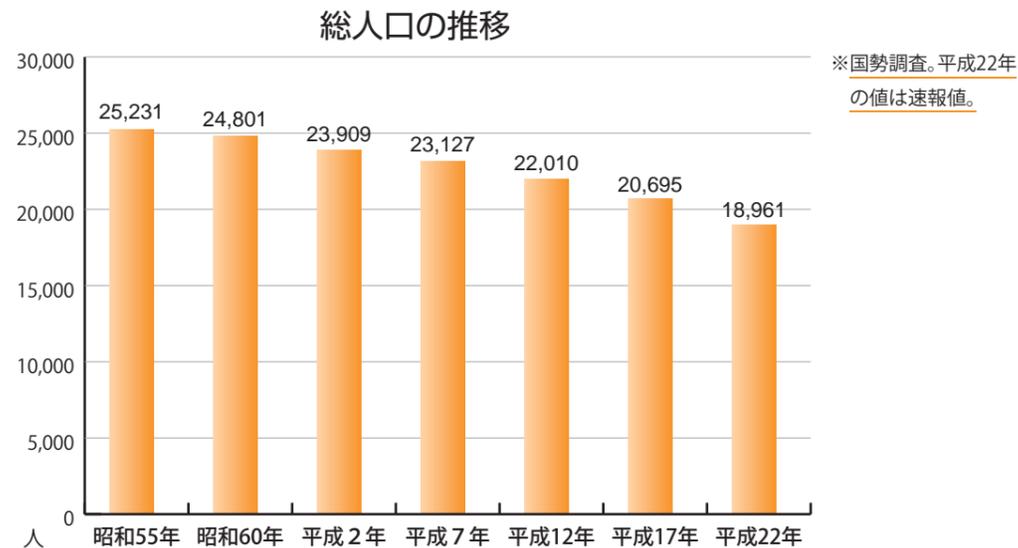
この1町4村が昭和29年に合併し、昭和34年に市となり、平成21年に市制施行50周年を迎えました。



## 2. 人口の動向

### 総人口

平成22年の国勢調査(平成22年12月24日山形県速報)では、本市の総人口は18,961人となっており、近年の人口推移をみると、一貫して減少傾向にあり、平成17年の20,695人から平成22年にかけて1,734人が減少しています。



### 年齢階層別人口構成比の推移



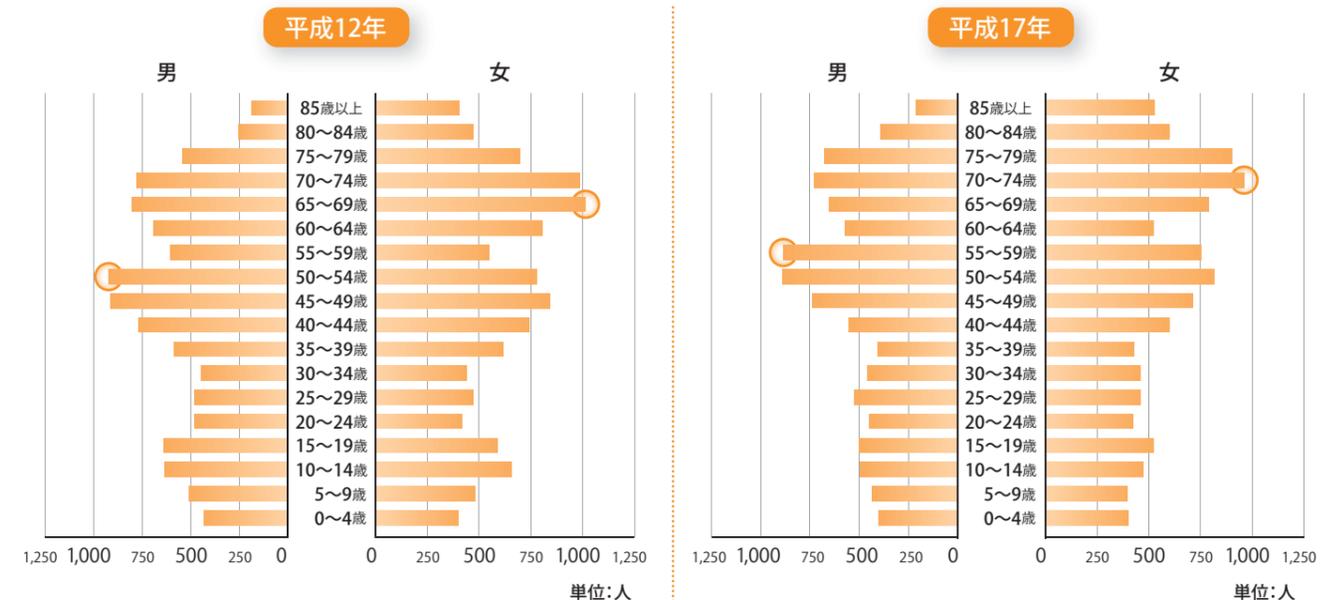
### 年齢階層別人口

年齢階層別人口でみると、平成17年の年少人口(14歳以下)は2,594人(12.5%)、生産年齢人口(15～64歳)は11,667人(56.4%)、高齢者人口(65歳以上)は6,434人(31.1%)となっており、平成12年と比較すると年少人口、生産年齢人口は人数、構成比ともに減少しています。一方、高齢者人口は人数、構成比ともに増加しています。

また、平成17年の全国及び県との比較でみると、年少人口比率(12.5%)は県平均(13.7%)、全国平均(13.7%)を下回る一方、高齢化率(31.1%)は県平均(25.5%)、全国平均(20.1%)を大きく上回ります。

さらに、5歳階級別人口の推移を人口ピラミッドでみると、平成17年の男性では55～59歳、女性では70～74歳の層が最も多く、こうした層が本計画の期間中に高齢者または後期高齢者になることが予想されます。

### 人口ピラミッドの推移(国勢調査)



就業人口

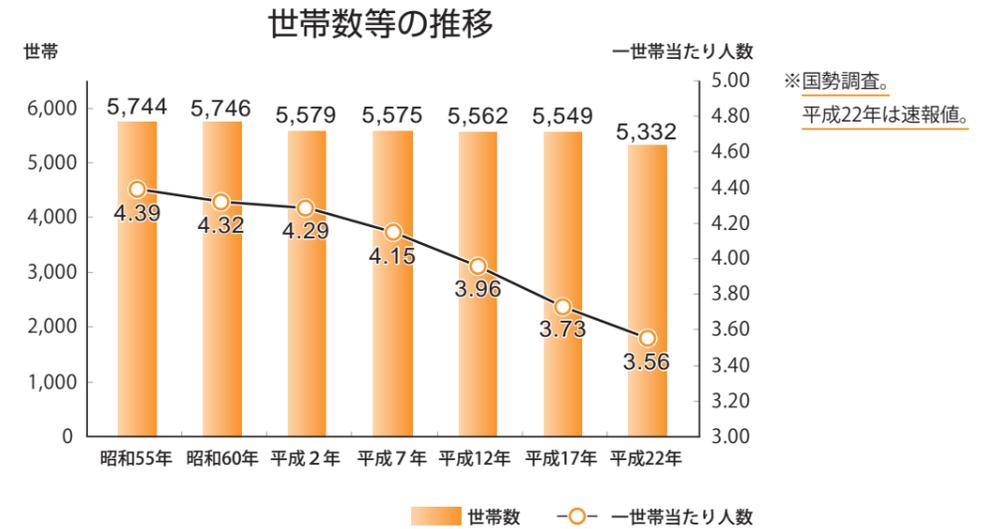
本市の産業別人口を割合で見ると、第1次産業では、近年の農業情勢を反映し、減少傾向にあります。第2次産業では、平成12年度まで増加傾向にありましたが、平成17年度には減少に転じました。第3次産業では、一貫して増加傾向にあります。第1次産業のほとんどが農業であり、98.8%を占めます。第2次産業は製造業が62.8%、建設業が37.0%を占め、第3次産業では、卸売・小売業が28.4%、サービス業が18.6%となっています。

区分	平成7年	平成12年	平成17年
総数	12,557人	11,871人	11,000人
第1次産業 就業人口比率	30.6%	25.7%	25.1%
第2次産業 就業人口比率	35.4%	36.7%	32.5%
第3次産業 就業人口比率	34.0%	37.6%	42.4%

世帯数

世帯数は、平成22年では5,332世帯で、平成17年の5,549世帯から217世帯の減少となっています。また、一世帯当たり人数をみると、平成22年では3.56人と平成17年の3.73人から減少しており、核家族化や単身世帯の増加など、世帯構成の多様化が進んでいることがうかがえます。(平成22年12月24日付け国勢調査山形県速報)

また、平成12年から平成17年での一般世帯のうち高齢者のいる世帯の動向をみると、特に65歳以上の高齢者単身世帯が約1.4倍に増加しています。



高齢者世帯の推移(国勢調査)

	65歳以上の 高齢者単身世帯	高齢者夫婦世帯	65歳以上の 高齢者のいる世帯
平成12年	247	480	3,802
平成17年	354	567	3,915
伸び率	1.43	1.18	1.03